

# 歴史における先入観

——一九八六年度始業講演 文理学部——

平野 邦雄

歴史というものをどう考えるか、私たちは歴史にとり囲まれて生活しているので、現在暮している国家、社会をどう受けとめるか、ということと、過去の歴史をどう考えるか、ということとは、非常に強く共通しています。つまり、私たちはごく普通にこの歴史の中で暮し、そしていろいろな影響のもとにひとつの観念をもっているのです。しかし、それが果して正しいものかどうか、ということになると、情報の不足とか、あるいは自分の先入観とかから、著しく片寄ったものであることに気付くこともあるかと思っています。

先入観とは、偏見ということでもあります。史学概論的にいえば、自分の利害とか打算、誤認、同情、反感、嫉視というような個人的感情も先入観となります。さらに文学的歪曲、つまり歴史小説を考えたら解りますし、また戦後殊に強いものに贖罪意識ともいうべきものがあります。これは戦争によって迷惑をかけたという天皇や政治家の発言によくみられます。贖罪意識をもつことが間違っているわけではありませんが、歴史には、事実を見定めるためのあくなき追究の態度が必要なのであって、そのような情緒的な感情をはじめから入れてしまうことは、かえって危険だといわなければなりません。歴史の進歩、変化にはかなり厳しいメカニズムがあります。そのどこをどうおさえれば、国際的な場においても再び選択を誤らぬ政治、行政がおこなえるのか、これは事実を見定める追究の態度の中から生れてくる判断であって、贖罪意識から生れてくるのではないことを心にとめておかなければならぬでしょう。

一般に、歴史の中でも同時代史は理解が難しいといわれます。これは、今述べたように、個人的感情があらゆるところに入りこみ過ぎているからでありましょう。近現代史からさらに同時代史に至るに従って、歴史学が客観性を失いかねないといわれますが、これは先入観を拭いきれないからでありましょう。今日は私たちが現在囲まれている状況についていささか考えてみることにしたいと思います。

さて、先日、学士会からポケット地図の冊子が送られてきました。それはヨーロッパでのアトラスをそのまま印刷しなおしたもので、ヨーロッパ旅行に持って行って下さい、というものです。初めの、見開きの部分に世界史の平面図が載せてあります。これを見ますと、中央にヨーロッパ大陸と、大西洋を隔ててアメリカ大陸があり、そして日本は東の方、アジアの一番端、地図が切れそうな所にポツンと置かれていてその先の太平洋は入っていません。この世界史上の地理観念は、この地図がヨーロッパ人の作ったものだからヨーロッパが中央にある、という単なる便宜主義で簡単に説明できるものではありません。こういうヨーロッパ中心の世界史の観念は、一五〇六世紀の地理上の新発見の時代にはじまり、さらに一八世紀末から一九世紀の産業革命によって圧倒的な生産力を誇ったヨーロッパ大陸が各地に植民地を保有した、いわゆる植民地主義を経て出来てきたものでしょう。しかし第一次大戦後になって、この世界史の観念はいささかゆらいできます。つまり、第一次大戦でヨーロッパを救ったのはアメリカであり、一方新しくソヴィエトが誕生したためです。ヨーロッパはアメリカとソヴィエトの狭間に位置する立場に変わってきたのです。さらに、アジアの一角から日本が登場してきたわけです。英・米・仏・伊・日を「五大強国」と呼びならわすようになり、ベルサイユ会議も、この五大国がリードしました。そのなかにアジアからは唯一日本が加わるという事態が生れました。この、第一次大戦後の世界の変化は、第二次大戦後、いっそうはっきりしてきた、ということになり

ましようか。アメリカとソヴィエトという異質の世界の対立と、ヨーロッパと日本という構図です。

ここで、日本について振り返ってみますが、日清戦争あたりから、その由来を迎える必要があります。日清戦争後、一八九五年頃から、ドイツ皇帝ウィルヘルム二世が黄禍論を主張し、ロシア皇帝ニコライ二世に強く訴えます。

これは極めて政治的な論議であったのですが、ヨーロッパ人種にとっては、ある程度の宣伝効果をもったといえましよう。その表れが、三国（ロシア・フランス・ドイツ）干渉による日本の遼東半島の放棄であり、このため、日本国内では「臥薪嘗胆」が合言葉になり、ロシアへの敵愾心とヨーロッパへの警戒心が強まってきたわけです。このあたりから、日本の将来の軌道が外れてきます。さらに追い打ちをかけるように、一九〇〇年代アメリカでの日本移民の迫害（アメリカからみれば制限）が起ります。二〇世紀に入って大正年間、移民法が成立し、移民の借地権、土地の領有権その他の制限、あるいは移民そのものを新規には受けつけない、等の取り決めが行われて、これは戦後まで継続しました。いうならば「対日排斥」です。

本学の創始者である新渡戸稲造が『武士道』を著したのはこの頃ですが、この著には、日本移民が迫害を受けることへの、ひとつのプロテストという意味があったのであります。つまり、キリスト教国民ではなくとも、日本にも武士道というひとつの立派な道徳律があり、日本人が道徳的に決して劣った存在でもなく、迫害を受けるいわれもない、という主張を込めて書かれたと思われます。

とにかく、このような流れの中から、次第に反米運動が日本国内に出はじめ、その空気はむしろ強められつつ、昭和初年に至ったと考えるとよいでしょう。ソヴィエトはスラヴなので西欧そのものではないのですが、その近代化の進め方は、日本からみればヨーロッパの一種と見られましたし、アメリカははじめからヨーロッパの落し子でありました。当時、日本の未来物語という形で、反米反ソ感情を助長するような多くの戦争物語が生れ、私の年少の頃、『少

年俱樂部』などにも掲載されていました。「敵中横断三百里」とか、「太平洋波高し」「巡洋艦最上」などなどです。反ソおよび反米感情——この二つのコントロールを誤ったということがその後の日本の進路を誤ったものにしたといえましょう。黄禍論を何としてもものきらねばならないという論議が、日本の国内で好ましい方向には決して展開しなかった、ということです。

ことにはっきりしてきたのが、日本だけはアジアから脱出したい、という「脱アジア」の願望です。日本も江戸時代まではつまらない国であったが、明治時代以後、文明開化、富国強兵のスローガンのもとに近代化が進み、その工業技術、軍事経済の達成度は、ヨーロッパにひけをとらないものになったのではないか。福澤諭吉が、門閥制度は親のかたきであると云い、それこそ「欧化」を「謳歌」した態度はそれだけのものではありませんでした。その後、日本は欧米列強五大国などの仲間入りをした、日本だけはアジアの諸国と画然と区別される、という意識です。

もうひとつの反応は、「アジア共栄圏」という発想——西洋に非西洋を対置させて、日本が盟主としてアジアを指導してゆかねばならない、というアジアナショナルリズムの思想です。岡倉天心の「アジアは一つ」という思想はこれに利用されました。

このように二つに思想は別れてゆくのですが、しかし、この二つの思想の根は余り変らないものといえます。つまり、日本はアジアの盟主であるという考え、インドは植民地化され、清朝以来の中国も半植民地化されたけれども、日本のみは植民地化を拒絶できた、そしていわば資本主義国家として成長を遂げた、という自負であります。黄禍論の延長と申しましょうか、ヨーロッパからの圧迫と感じた問題が、日本の中にこのような反発、反応をまきおこした、そして、このような累積した観念が、ヨーロッパ風の富国強兵をはかり、アジアを率いるために、逆に朝鮮半島、中国大陆を侵略し、これを自らの基盤にしようと図ったのであって、これがアジアの近代化を妨げたという矛盾

であります。この二つの思想はともにこのような側面をもっているのです。

今でも、日本だけがアジアの中で別格である、先進的国民、西側諸国の一員である、という考え方をする、こういう発想は基本的に余り変らないのです。日本の近代化は西欧化と同義語として使われてきましたし、まだその意識から脱却していないと思えます。そして、その国際環境はかつての再現という色彩をもちはじめています。

ところで、日本の近代化に対し、疑い、これを否定しようとした学説もありました。左翼、いわゆるマルクス主義に基づく学説ですが、明治の近代日本は決して近代国家——純粋な民主的資本主義国家とは認められない、とする議論を展開していました。しかしこれは全体の趨勢からみると、やはり主流ではなかったのです。一九三三年（昭和八年）『日本資本主義発達史講座』としてまとめられました学説には、講座派、労農派といわれる違いがありました。が、主要な流れは、日本近代の天皇制をヨーロッパの絶対主義的な王制に比定したのであり、明治国家は封建的地主と、新しい産業資本家との勢力均衡の上に成り立った絶対王制にしか過ぎない、いわば「軍事的封建的資本主義」なので、江戸時代はこれを生み出した母体である、したがって文字どおり専制的な封建制が行われた暗黒時代である、というような見方をして、日本の国家の後進性を強く指摘しようとしたわけです。

この理論は昭和十年代の軍国主義化が厳しくなった時期、今次の大戦で日本が誤った選択をしたことが誰の目にも明らかになったとき——すでに左翼運動は全て芽をつまめた後——、その正当性が実証されたようにみえました。特に日本が敗戦し、近代的成绩をことごとく失ったと感じたときに、日本の近代化がいかにまやかしかつたかが実証されたように考えました。したがって、日本の歴史家の戦後の論文（江戸時代、明治時代に関する論文）はトーンが非常に暗いのです。戦後にマルクス主義社会学が華やかに復活したのは記憶に新しいところです。ところが、その後、戦後の目覚しい復興と、経済成長とが、再び論調を変えてゆきました。

日本の近世・近代の分野の歴史学界がまだ低迷している時期に先鞭をつけたのはアメリカの日本学研究者たちでした。元祖は本学に深い関係深いライシャワー博士 (A. K. Reischauer) でありまして、現在すでに歴大な日本研究者群をアメリカは抱えています。ジョン・W・ホール (John W. Hall) マリウス・B・ジャンセン (Marius B. Jansen) R・P・ドーアー (Ronald P. Dore) 等代表的な研究者の著書はほとんど翻訳されていますし、もうその人たちの弟子の時代に入っています。

彼等の研究の主流は江戸時代に向けられます。何故日本のみがアジアの先進国として戦後再び目覚しく擡頭してきたのか、明治時代もそうであったが、第二次大戦後、速やかにアジアで唯一議会制民主主義を定着させつつ工業化をすすめる、経済的發展を成し遂げたのか——しばしば戦後の奇蹟という言葉で云われますが——この謎解きでありまして、極めて実際的關心からの研究です。江戸時代はそんなに後れた時代ではなかったのではないか、徳川時代を見直そう、というわけです。彼等の観点は、政治と文化・教育に向けられます。マルクス主義歴史学が中心に置いた経済的な観点を欠くものといってもよいかもしれません。政治的にヨーロッパのフェューダリズム (封建制度) と比べて、日本にはどういう特質があるのか、極めて類似している点がある一方、極めて特異な体質をもつ、そして総体としては、日本の江戸時代に封建的性格は稀薄であった、と考えました。例えば、将軍・大名の家臣団がその独立性をいかに失っていたか——封建的従士制の場合は家臣団そのものが所領を分封されてもっているのに対し、日本の場合すべて祿米に代っていたのであり、すでに所領というものの表示は形式的なものに過ぎない、つまり、彼等は大名という政治機構の官僚的家臣に過ぎなくなってきた、というような見方をします。あるいは、行政機構が発達した中で、藩学で学んだ下級武士が、いかに上層身分の政治を代行し得たか——身分制は表面上のもので、養子制度、婿入が普及し、門閥が下から支えられ、内容を変化させ、すでに「人材」ということばが藩内政治で用いられていた等々、いろ

いろいろな意味で能力のある者によって政治が運営されているという点に着目するわけです。將軍は形ばかりのものに過ぎず、大名も場合によってはほとんど飾りもので、実際に政治を摂ったのは能力のある官僚である、というふうな見方をして、江戸時代の封建制を少なく見積ろうとしたわけです。

もうひとつ注目されるのが、日本の大衆のいわゆる開明度、文明化の度合についてです。ヨーロッパ諸国に比べて、日本は読み、書き、ソロバンがいかにか巧みにできたかを実例をもってあげ、徳川の為政者は教育を承認し、その普及をはかるのに何ら恐れるところがなかった。それはヨーロッパと違って、諸階級間の敵対意識が驚くほど少なかったからであるとし、幕末の大衆の識字率はほぼ三五パーセントに達しているという計算もしています。これは驚くべき教育の普及で、他のアジア社会で、大衆はほとんど文盲であり、ヨーロッパでもこの数字には及ばない、というのであります。この発想は、現在の大学生のパーセンテージ、現在の義務教育期間九年の普及のパーセンテージ（九、九パーセント）にまで応用して、けっきょく、近代的な国家組織、近代的な技術が大衆に受け容れられる条件が江戸時代に熟成していた、と考えたのです。

このことはもちろん間違いないと思います。明治五年の学制改革において、「村に不学の輩を無からしめることを期する」とか、「学問は身を立つる財本ともいふべきものにして、人たるもの誰か学ばずして可ならんや」というようなことが堂々と布告され、「一般の人民他事を抛ち自ら奮いて必ず学に従事せしむべし」というような言葉もあります。こうしたものが抵抗感なく受け容れられる素地があり、教育の普及が早かったのも事実です。明治八、九年頃から新しい小学校が次々に建てられます。現在でも現地に保存されているものがかなりあります。これは村々に、お寺とか旧藩校・郷学とかいう形でもとからあったものをひきつぎ、拡大したもので、競って立派な洋式建造物を建てました。調べてみますと、この建設費を負担しているのは主として市町村であって、主な財源として、町有

林、村有林を売り払った記録が多々残っています。あるいはまた、寄附金——地主の何十円という寄附、一般の百姓からは一円、二円という寄附が集められ、町・村をあげての事業だったことが解ります。これ等を見ますと、これから学問で身を立てるのだという空気が漲っているのを感じます。それはすでに江戸時代にも存在した空気でもありませんが、政府の指導のもとに一気に花開いたのであります。

しかし、日本の近代化の要因をこのような点に求めようとするのは果して正しいかと申しますと、いかにもアメリカの実用主義的な発想を思わせ、あまり賛成できません。日本の歴史をよく考えますと、これは江戸時代に限られたことではない、ということが解ります。古代史では、現在いろいろな所で発掘が進んでいますが、七、八世紀から一、二世紀の古代の遺跡から大量の木簡・瓦・土器等に記した文字の使用例がたくさん発見されます。文字の使用も、役所跡から出てくるのであれば役人が書いたということではありますが、役所でも、国・郡・郷の郷レベルの役所から、さらに一般の住居跡出土の土器片、あるいは寺跡出土の瓦・埴——百姓たちが寄附したものです。これにヘラや墨で地名や名前を記した例が多くあります。これ等を細かく集めてゆく作業が必要なわけで、現在この作業を進めているのですが、日本の古代国家における文字の普及——他の古代国家では考えられない点だと思いますが、もう少しこの点がはっきりすると、日本の文明・社会を論ずる際の有力な論拠になると思います。古代国家は文書行政、つまり文字による相互の伝達・記録保存が全国的に行われたので、文字の普及という点からみれば、それは日本で江戸時代だけの特異な現象とはいえません。アメリカの研究者も云っていますが、日本には、江戸時代に知識を支配階級で独占するということがなかったのですが、ヨーロッパや中国の貴族階級は、むしろ知識を独占したのです。独占ということが自らの権力を維持する手段でもあったのです。ところが、日本の古代貴族にしても、中国に赴いて多くの本を買い、それを写し、そして流通させ、新知識の獲得と普及という国家的使命を果すことによって自分の地位を保



ちます。そういう文化の受けとめ方の違いがあります。わが国で文化の普及が極めて早いのはそのためでもあり、また文字の問題も同じようにして説明がつきます。古代の民衆も、自分の姓名・年令・家族の名前、周辺の地名、そして数字と九九による計算位は行ったと思います。戸籍・計帳の記載にはじまり、国家に差し出すいろいろな租税の計算等、国家の運営にそれらは必要だったのでしょう。この点からいえば、教育と文字の問題はかなりロングレンジに考えねばならぬ問題でありまして、近代化という問題を取りあげる場合にも、こうした日本歴史の特性は強く作用したでありましょうが、それは古代国家を形成する場合と同じく、非常に前進的役割を果たしたということであり、明治期だけの特異現象ではないと思うのです。

もし、このような問題を取りあげるとすれば、技術の問題の方がより本質的です。江戸時代の職人技術が非常に高度なレベルに達していたことは間違いありません。これも教育・文字と同じように、その以前から長年培われた教養・能力等潜在的にあったのは事実ですが、技術が特に江戸時代に発達したことも事実で、こちらの方がむしろショー・トレーンジに江戸時代を特色づける問題といえるかもしれません。特に木工の技術——木工工具の発達、木材の育成と選定、力学的な構造材の組合せ、継ぎ手等微細に発達しています。これはあらゆる建築に応用されました。明治維新の殖産工業政策で外国、特にイギリス、フランスから大勢の技術指導者がやって来しました。明治時代の日本の輸出のトップであった絹糸、絹織物技術はフランスからの技術輸入ですし、一方船舶あるいは燈台等の海洋技術はイギリスから学びました。明治三、四年に、日本で八箇所造られた燈台がありますが、現存する燈台の職人の技術を一見するなら、恐らく感銘を受けるでありましょう。神奈川和親条約、江戸通商条約を経て一八六六年に結んだ改税約書の第一条に、外国船の出入のために燈台を建設することが義務づけられて、東京湾に入る困難な地として、観音崎とともに建設された神子元島燈台の例をあげてみましょう。この燈台建設の指導をしたのはイギリス人技師ブランドン

ですが、彼は材料まで指定した詳細な設計図を持ち込みました。日本の石工たちは設計図を読みとり、直ちに工事に移り得ただけでなく、彼の指示するレンガやポルトランドセメントをやめて自分たちの考えで伊豆石と呼ばれる伊豆の凝灰岩を使って、これを半円形にくりぬき、基礎の直径七メートルで上部に向かって通減する設計図どおりのものを造りあげました。神子元島の附近は波浪が激しく、飛沫が二メートルの燈台を越えることもあって、セメントやレンガではもたない、と考えたのでありましょう。一〇〇年以上経った現在でもこの建造物はビクともしていません。もうひとつあげれば、江戸時代における地図の作成と普及です。幕府から大名に及ぶまで、正確な方位、高低差、距離の測量に基づいた地図を作成し、また町人たちは多彩な遊覧図の類を出版しました。このことは驚くべきことと思います。

このような優れた技術力が、すでに日本にあったということです。識字率をあげるよりは、この方が明治時代の説明として適当なのではないか、と考えます。

しかし、今日申したいのはそのようなことはありません。何故日本だけが、ヨーロッパあるいはアメリカから見ても、アジアの中で順当に独立を維持しつつ近代化を完了したか、ということがそのようなことで説明できるとは思えない点についてであります。私たちが見落しているわけではないはずですが、いろいろな先入観に惑わされて、身に泌みて感じてはいない点があります。すでに明治維新の研究家が以前から触れていることですが、日本にやって来たヨーロッパ勢力を考えてみますと、文字どおり軍艦を率いて来た帝国主義的勢力です。ロシアはしばらくおくとして、イギリス、フランスともに産業革命以後の圧倒的な商品生産を誇っていましたから、関税障壁をとり払わせ、港を開かせれば十分採算が取れ、廉価で圧倒的な品物を持ち込み得たわけです。“自由主義の友”(Friend of Liberalism)というのが当時のスローガンです。日本等が今固執している自由主義貿易に似ていますが、これは強者の論

理です。ただ、イギリス、フランスの目的はそういうことであっても、彼等が軍事的圧力を背景にして港を開かせたのは事実で、ペリーが四隻の軍艦を率いてやって来たことは記憶に新しいところです。しかし、インドや中国ではこの比ではなかったのです。文字どおり「大砲の砲口のもとに」でありました。

中国では阿片戦争そして太平天国の乱という長年の反乱を起しました。イギリスが何故インドから大量の阿片を持ち込んだかと云いますと、これが外貨収入の重要な手段であり、逆にインドに綿布を売り込むためでもありました。一八三九年、清朝の役人林則徐が広東で阿片を焼き棄てたことに端を発した阿片戦争ですが、イギリス軍はたちまち南京に迫り、南京条約を締結して、清国は開港を余儀無くされたわけです。そして一八五〇―六六年の一五年間にわたる太平天国の乱へと進みます。これは民衆の反乱で、ひとつには漢民族の清朝に対する不満の爆発、ひとつには外国のイギリス勢力に対する民族主義闘争、という二つの面がありました。清朝政府は、けっきょくヨーロッパ列強の力を借りて鎮圧しました。

インドの場合には一八五七年、東インド会社の傭兵たるインド土民兵（セポイ）の起した反乱が、たちまちインド領土の半分近くをまきこみ、広く農民大衆も参加して、いわゆるセポイの反乱という民族闘争となりました。

こうした中国、インドにおける長年の反乱の経過が、ヨーロッパ勢力に非常に大きな教訓を与えたという点は重要です。日本の場合について云いますと、もし幕府がフランスと手を結んで戦えば十分戦えたはずであります。事実十分余力があったと思われますが、あえてそれをしなかったというのは幕府の賢明な選択であったと思います。しかし、それ以上に、イギリス、フランス側が警戒したのです。既存の政治勢力を利用して、上から下への改革を基本方針とし、民族的な反乱を招いたのでは、貿易はし難いということを考えていたに違いないと思われます。明治時代のイギリス外交官たちの記録等、それを余すところなく示しています。外圧の性格が、中国やインドの場合とは、日本

の場合かなり違ってきていたのです。

もし、中国やインドの役割がなかったならば、果して日本が独立を保ちながら順当に近代化ができたかどうか、これは疑問です。明治維新を短期的にみるなら、こういう点をもっと見てゆかねばならないでしょう。これは、識字率とか技術力とかとは全く質を異にする別の領域の問題ですが、先程話した、インドが植民地化され、中国が半植民地化されてゆく流れの中で、むしろ日本はそうした中国や朝鮮半島を土台にして、自らの近代化をはかっていったということと、極めて類似した問題であるといえます。日本人がそのことを自覚するかどうか、これは非常に肝要な点である、私は思います。そこで、あえて、このようなことを申したのですが、今までの話は、すべて少しずつ単純化し、少しずつある点を強調してありますから、細かいニュアンスまで、その通りで、その他の史実はなかったと受け取られては困りますが、歴史の先入観についての論点を提供することによって、諸君に考えてみてもらいたいと思つたのであります。歴史というものは、古代社会を理解する方法も、近代社会や国家を理解する方法も、本質的にいえばそう変りない、あるいは現在私たちが生きているその周辺を見廻している目も、本質的にいえば余り変りがない、ということをお今日は申し上げたのであります。

(一九八六、四、一〇)